

創世記 第18章 1～10節 b (10節 c～14節)

コロサイ書 第1章 21～29節

ルカによる福音書 第10章 38～42節

コロナ禍が収まったようで、収まっておらず、梅雨明けしたようで、雨が続き、その合間には猛暑と、なんとも過ごしにくい日々が続いております。皆さまどうぞ、体調にはお気をつけください。

本日の旧約日課は、「創世記」です。「創世記」の1章から11章の原初史と呼ばれる部分です。物語として非常に面白く、ノアの箱舟など有名な話が沢山あります。今日の旧約日課は、その原初史のあとの部分ですが、ここにも面白い物語がたくさんあります。

本日のお話は、アブラハムが三人の客人の姿となった主を迎えるところから始まります。「目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、言った。『お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。』」

(創18:2～3)。訪れてきた三人に対して、アブラハムの方から声をかけましたが、それは、客人をもてなすことが、旧約聖書の時代から大切な習慣であったからです。そのもてなしの内容が、そのあとに続いています。

「アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。『早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい』」(創18:6)。パン菓子をお出しする、しかし、それだけではありません。「アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしいそうな子牛を選び、召し使いに渡し、急いで料理させた。アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした」(創18:7-8)。サラ手作りのパン菓子から始まり、豪華な料理へと続き、アブラハムは、最大限のもてなしをしたのでした。

三人の内のひとりが、「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう」(創18:10)と発言するのですが、礼拝で読まれる部分と、配布した聖書日課は、ここまでです。しかし、聖書日課としてはかっこ内を含めて、14節まで続きます。そして、この後の方が、ここでのお話の本題といえます。

サラはアブラハムと三人とのやり取りを、天幕の横の入口で聞いていました。天幕の入り口で聞いているのは、客をもてなす席に参加できないからです。それでもしっかりと盗み聞きしているかのような描写は、ふとした日常性を感じる面白い場面です。しかし、問題はそこではありません。彼女は発言を聞いて笑ったのでした。「サラはひそかに笑った。自分は年をとり、も

はや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。」

（創 18：12）とある通りです。「ひそかに」という表現は、「中で、内で」を意味しますので、心の中で笑ったということにもなります。

表立って大笑いしたわけではありませんが、心の中で笑うというのも、あまりよいことではありません。しかし、笑ったのは、サラだけではありませんでした。少し前にアブラハムも、主なる神様にサラに男の子が生まれると告げられた時、「アブラハムはひれ伏した。しかし笑って、ひそかに言った。

『百歳の男に子供が生まれるだろうか。九十歳のサラに子供が産めるだろうか。』」（創 17：17）であったのです。アブラハムも笑ったのでした。そして、心の中でつぶやいたのでした。しかし、そうであるがゆえに、生まれた男の子の名前は、「イサク（彼は笑う）」となったのです。

アブラハム、そしてここでのサラはなぜ笑ったのか。現代の常識で判断する必要もなく、聖書時代の常識から考えても、人間的に出産が不可能な年齢だという理性的判断からでしょう。あるいは、子どもを望みながらも与えられなかった、自分の歩みを振り返り、悲しみのあまり思わず笑ったのかもしれない。いずれにして、紀元前の時代であっても、主なる神様の言葉が、人間の理解を超えている場合、人間の理性と常識がその内容を打ち消してしまう姿が描かれています。そのことに『聖書』の奥深さを感じます。

主なる神様の言葉を聞いて、心の中で笑ってしまったアブラハムとサラですが、その反応に関係なく、主の言葉は続きます。「主に不可能なことがあるうか。来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている』（創 18：14）。主なる神様は17章でアブラハムに対して、子孫を増やすという約束をしているのですが、その約束は人間の側の状況に関係なく、恩寵として実行されるのでした。

かっこ内を含めても聖書日課はそこまでですが、お話はもう1節続いています。その恩寵を目の当たりからでしょうか、サラは、恐ろしくなり「打ち消して言った。『わたしは笑いませんでした』』」と言います。しかし、「主は言われた。『いや、あなたは確かに笑った。』』」とのやり取りがあり、お話は終わるのです（創 18：15）。お話の登場人物としてサラは、心の中で笑ったわけですから、描写としては、見てわかるように笑っていません。それゆえに、笑いませんでしたと告げるのは正しいのですが、笑ったことはすでに読者に伝わっています。きっとこの部分を演劇などで再現しようとしたら、表面は笑っていないけれど、心の中で笑う演技をしてくださいとなるので、大変かもしれません。ここでのお話は、主なる神様は、人間の思いが、たとえそれが表面に出ていなくても理解しておられることを告げています。しかし、それ以上に大切なことは、主なる神様とは、サラの反応、すなわち人間の反応がたとえ否定的であっても、約束の実行を宣言される方であるということです。それはまとめれば、主なる神様に不可能なことはない、人間の思いを超えて、常識を超えて働かれる、それが『聖書』の神様である、そのよ

うな当たり前のことを告げています。そして、今日の旧約のお話は終わります。

さて、福音書は、有名なマルタとマリアの姉妹のお話です。このお話も有名です。特に、教会における女性の役割、あるいは、教会での様々な奉仕をどう考えるかというときに、参考とされる箇所です。

マルタは、イエスをもてなすことに熱心であり、マリアはそれをしないでイエスの教えに聞き入っていました。

「マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。『主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。』」（ルカ 10：40）

このようにマルタは、マリアのことで苛立って、直接イエス様に苦情を言います。マリアに直接言うのではなくイエス様に苦情を言って、しかつてもらうというマルタの姿は、なんとも日常的な姿が現れた、という感じがあります。そのようなマルタに対して、イエス様は「『マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。10:42 しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。』（ルカ 10：41-42）と答えます。

この物語が言わんとしていることは、習慣や礼儀などを含めて人間的視点で大切なことではなく、主なる神様の視点で大切なものを選ぶことです。たとえば、旅人をもてなすという大切な習慣があったとしても、それよりも大切なことがあるということです。イエス様は、単なる訪問客ではなく、宣教の旅で出て、いま訪問しているのです。その宣教の内容をしっかりと受け止めなければならないということです。

このマルタとマリアのお話は、抽象的に意味を引き出して考えても、日常的な事柄に当てはめて考えてもよいのですが、マリアのように一つのことに集中することは大切です。しかし、多く人は、マルタ的な生き方の中で日々努力し、また苦悩するのでしょうか。そのような努力や苦悩は、必要な事柄であり不可欠です。教会というあつまりもそのような努力が集まって成立しています。その意味では、マルタ的な事柄を、誰かにすべて依存して、マリア的な要素だけで日々を過ごすということは、まさに貴族階級的な生き方と言えるでしょう。そのように考えますと、このお話は安易に普遍化できないと思います。

しかし、人間にとって、ただ生きているのではなく、何かをしっかりと見つめるような、マリアの姿から学ぶことも多くあると思います。そして、大切な一つのことがあれば、マルタ的な生活においても、大きな変化が起こるのです。これらのことを考えますと、マルタとマリアのお話は、読む人一人ひとりに、それぞれの人生の時と場合に合わせた、人生についての示唆を与えるものであるといえます。それぞれにとって、マリア的な要素を見出すこ

とが大切だと考えることや、マルタ的な要素を身に着けることが先決だ、などを見出すということです。しかし、このお話は、そのような個人的な受け止め方だけではなく、教会という存在のありかたも示していると思います。教会はマリア的な要素とマルタ的な要素の二つから成り立っているからです。

教会は、日常生活の延長ではなく、イエス様を通して主なる神様によって集められるという、非日常的な時を過ごす「時」であり「場」です。その意味では、マリア的な要素がなければ、教会として存在しえません。しかし、この世界にある「見える教会」である以上、この世界からまったく隔離された状態で存在するわけではありません。この世界で起こっている事柄と無関係では存在できないのです。その意味では、マルタ的な要素を全く忘れることもできないのです。

しかし(もう一度論理がひっくり返りますが)、そうはいっても、教会は、この世界の様々な集まり同じではありません。教会は、それが存在する地域の何かと全く同じではないのです。あるいは、学術的な営み何か、政治的な営みの何かなど、地上の事柄と全く同じように考えあるいは行動するわけでもないのです。その意味では、マルタ的な事柄もすべてではないのです。

これらの関係は、ちょうど、主なる神様を愛することと、隣人を愛することの二つについて、それらを別々に考えることも、またそれらの愛の配分・割合を考えることもできないという事柄と同じであると思います。

今日、国の内外で、理性で考えても、受け止められないような事柄が多くあります。実際起きた事柄で、その背景や事実関係もわからないことも多くありますが、一瞬のひらめきから、一つのことだけを思って、きわめて暴力的な手段に至ってしまうことすら起きています。本日の聖書日課、マリアとマルタの姿、そしてアブラハムとサラの姿から学ぶことは、わたしたちが、それぞれの生き方で努力し、成功しあるいは失敗したとしても、主なる神様は、それらの思いを超えて、よき方向へと導いてくださるということです。それでは、人間の努力や苦悩に何か意味があるのかと思えるのですが、そうではありません。イエス様を通してわたしたちが気づくこと、それを具体化することは、平和につながるという確信があり、その歩みの中に真の喜びがあると知っているからです。

イエス様は、真剣に話を聞くマリアのまなざしを受けながらも、マルタの働きも受け入れてくださっていました。イエス様はその両方を受け止め、大切にされたのです。イエス様がおられるとき、その両方が尊いこととされるのです。そしてその両方があって、真の平和の「時」と「場」が形成されるのです。わたしたちも、イエス様を中心にして、マリア的な要素をしっかりと持ちつつ、しかし、マルタ的な要素を具体化できる教会でありたいと思います。そして、その教会を守り続ける歩みの中で、平和へとつながる道を、求め続けたと思います。